

## 宋初四代の帝位継承と宦官

### はじめに

開宝九年（九七六）十月癸丑の深夜四更（午前二時前後）、開封の宮城内にある万歳殿で、北宋王朝初代皇帝の太祖趙匡胤は息を引き取った。享年五十。中華統一を成し遂げぬままの崩御であった。そして北宋王朝で最初の帝位継承が発生する。このとき、一連の出来事に含まれるのが、史上有名な「灯影斧声」と呼ばれる事件であって、後を継いだ二代目太宗による、兄・太祖に対する弑逆疑惑であった。

「灯影斧声」のあらましについては後ほど瞥見するとして、その真相については、これまでも多くの先行研究による考察が行われている。<sup>①</sup>しかし当時の史料が多く隠避して言及せず、残されたものにも少なからぬ改変がなされていると考えれば、もはやその説明は本稿などでは手に負えない、まさしく「千古の疑案」である。この中にあって本稿で注目しようとするのは、太祖崩御直後の様子についてである。すなわち、

宋皇后（太祖の皇后（引用者注。以下同じ））王繼恩をして出て、貴州防御使（趙德芳。太祖の皇子）を召さしむ。繼恩、太祖

藤 本 猛

の、国を晋王（太祖の弟。のちの太宗）に伝うるの志素より定まれるを以て、乃ち德芳に詣らず、徑ちに開封府に趨りて晋王を召す、……乃ち王と俱に進みて寢殿に至る。后、繼恩至るを聞き、問いて曰く「德芳来たるや」と。繼恩曰く「晋王至れり」と。后、王を見、愕然として遽かに官家と呼び、曰く「吾が母子の命、皆官家に託さん」と。王泣きて曰く「共に富貴を保たん、憂うること勿きなり」と。<sup>②</sup>

非常にドラマチックな場面である。太祖が亡くなったその夜、皇后宋氏の命を受けた宦官・王繼恩は、太祖四子の德芳を召し出すよう言われたにもかかわらず、亡き太祖の「伝国の意思」に従って、太祖の弟である晋王趙光義を召し出した。やって来た晋王の姿を見た皇后は瞬時にすべてを悟り、自らと息子德芳（おそらくは実子ではない）の命運を委ねるのであった。<sup>③</sup>

ここで見られる宦官王繼恩の行動は、一体どう解すべきであろうか。彼による太祖の遺志の確認というのは確かなものであるのか。それとも晋王との間に何か密約があったのか。いくつもの疑問が浮かんでくるが、いずれにせよ彼の行動は、北宋最初の帝位継承において決定的

な役割を果たしたといえるであろう。

筆者はかつて北宋時代の宦官に関する前稿で、時に宦官らが皇帝の即位に力を果たす、いわゆる「定策の功」を得ることがあったと指摘したが、見たように北宋最初の帝位継承に際して、宦官・王継恩はすでにある意味での「定策の功」を得ていた。また北宋初期の歴史を見ていくと、宦官らが帝位継承に際して様々な活動（暗躍）をしていたことが判明する。そこで本稿では、北宋初四代にわたる帝位継承時にまつわる宦官らの行動に注目し、彼らの活動のさまを確認していきたい。

## 一、「灯影斧声」——初代太祖から二代太宗へ

### (一) 事件の経緯

まず最初に見るのは、「はじめに」で述べた北宋最初の帝位継承における王継恩の活動である。この太祖から太宗への継承については、すでに述べたように昔から様々な疑惑が出されており、それについての研究も多くなされてきた。その大きな要因が「灯影斧声」と呼ばれる逸話であり、それは次のようなものであった。

上 其の言を聞き、即夜に晋王を召し、属すに後事を以てす。左右皆聞くを得ず、但だ遥かに灯影の下、晋王時に或いは席を離れ、遜避する所の状有るがときを見るのみ、既にして上 柱斧を引きて地を蹴ち、大声にて晋王に謂いて曰く「好く之を為せ」と。<sup>(5)</sup>

この、どこまでが真実か捉えにくい話は、僧文瑩の撰になる『湘山野録』という随筆でなされたもので、いわば野史で語られた話であるが、この話を『長編』は本文に掲げている。はたして死の直前にある

人物が、実の弟と二人きりで話をしている最中、斧を振り上げて地に叩き付けるような行為をとるであろうか。きわめて異様な光景を語っているのであるが、綿密な史料批判で知られる李燾は、この話を『長編』本文に載せており、そこにはある意図があったと思われる。『長編』は、先行する『実録』『国史』といった公式記録や、個人の随筆・墓誌銘類を参照して編纂されたが、ここでは『実録』『国史』に載らない「灯影斧声」の話を、『湘山野録』から採録したという。これはつまり残された『実録』『国史』の信憑性が低く、むしろ野史で伝えられた話の方が当時の真相に近い可能性を指摘しているのである。<sup>(6)</sup>

事実、『長編』ではこの箇所の詳細な李燾の注が付けられており、同様の話は蔡惇の『直筆』にもあって、さらに別系統の話を伝える王禹偁『建隆遺事』の記事の方は採用しない、といった史料批判の様相が説明されている。そのような吟味を経て、この話が『長編』本文に載せられているのである。太祖から太宗への帝位継承に、なにがしか不審な点があることを暗示しているのである。

『長編』にはこの話につながる逸話も載せられている。整屋県に張守真という道士がおり、「神」を降ろしてその声を聞き取ることができた。太祖は病に倒れると、その張守真を都まで召し出した。そこで登場するのが王継恩である。王継恩は太祖に命じられて建隆観に黄籙醮を設置し、そこで張守真が「神」降ろしを行った。建隆観とは、後周世宗の創建にかかり、太祖によって年号を賜ったあと、当時開封における道教儀礼の拠点となっていた場所であった。<sup>(7)</sup> このとき「神」が「天上の宮闕已に成り、玉鎖開かる。晋王仁心有り」と述べたという。先に引用した「灯影斧声」の史料冒頭、太祖が「その言葉を聞き」と

いう「その言葉」は、この「神」の託宣のことであった。つまり、この託宣を信じて、太祖は自らの皇子らを差し置き、太宗を後継者に決めたということになっているのである。やはり事の真偽は分からないものの、やや不自然な感じは否めない。だがこの話は『国史』符瑞志に載せられていたものだという。ここでいう『国史』は『三朝国史』であろうし、当該部分の原型は『太祖太宗国史』であろうが、太祖が太宗に伝位する意思を固めたという話がことさらに載せられているところに、何らかの意図を感じないこともない。

## (二) 王継恩

この張守真に関する記事でも重要な役割を果たしているのが王継恩であった。明記はされぬものの、太祖の命により祈禱壇をしつらえた王継恩は、その後も張守真を案内したのであるうし、「神」による託宣のその場にいた可能性は高いと思われる。あくまでもこの話が史実であれば、ということになるが、『国史』すなわち北宋前中期における公式見解としてはそういうことになるのだろう。この流れの先に、「はじめに」で見たような王継恩の行動があるのである。つまり、王継恩が皇后の意思を無視し、晋王（のちの太宗）を呼びに走ったのは、太祖の意思（遺志）が晋王への伝国にあったことを尊重したものとされていたが、それはこの張守真による「神」の託宣を聞き、太祖の遺志を確認していたのが王継恩であって、そのゆえに太宗即位が導き出されたとする筋書きであったのだろう。言い換えれば、太宗による帝位継承の正統性（正当性）は、この王継恩によって担保されていることになる。

そうなれば気になるのは王継恩という宦官がどのような人物で、果たして晋王（のちの太宗）とどのような関係があったのか、ということである。『宋史』本伝によると、王継恩は後周の顯徳年間からの宦官であり、そういう意味では太祖とともに後周の世宗に仕えた人物であった。当初は宦官張氏の養子で張德鈞と名乗っていたが、北宋になって本宗の王氏に復し、太祖から名を賜ったという。そうした経緯からしても太祖の寵愛を受けていたのであるうし、やがて「内侍行首」にまで昇進している。「内侍行首」というのがどのような職掌を持っていたかは史料に見えないが、「行首」とあるので、宦官の責任者、リーダーであったのだろう。江南攻略のときには寶神興らと禁兵を率いて采石で戦ったというから、曹彬・潘美によってなされた開宝八年（九七五）の南唐攻略戦に内侍のトップとして参戦していたと考えられる。太祖が崩じる開宝九年（九七六）の春には「裏面内班小底都知」となり、「金紫を賜」ったというから、宦官でありながら紫服と金魚袋を賜っている。かなり破格の扱いを受けており、その信任ぶりが窺える。

このような事績を見ると、王継恩は非常に太祖とのつながりの深い宦官であったと考えられる。また随筆史料によると、かつて太祖が朝議の場で、勢いに任せた命令を下してしまつて失敗し、そのあと便殿に座して鬱々と楽しまずにいたとき、そのわけを王継恩が訊ねることがあったという。<sup>(13)</sup> このエピソード自体は、そのときの太祖の言葉から、彼が君主たることの重責をいかに感じていたかを示したもののだが、自分の意気消沈している弱い側面を王継恩に見られても気にせず、また逆に、忌憚なくそこに寄り添うことのできている王継恩の姿が映し出

窓  
されている。

史  
これらのことから王繼恩は、諱を賜ったことにはじまり、確かに太祖の寵愛厚い宦官であったと言えよう。一方、管見の限り、彼と太宗との親交を窺わせる史料は見つけられていない。しかし、やや気になるのは、太祖が崩じたまさにその月、王繼恩が武德使を加えられていることである。<sup>(14)</sup>この武德使はのちに皇城使と改名された、諸司使東班の最上位に位する武階であった。いまだ建国初期ともいえる時期にあって、この後次第に整えられていく宦官制度のことを考慮する必要があるものの、淳化五年（九九四）八月に寶神興が莊宅使に充てられた際、ようやく「内官の諸司使を領すること此に始まる」と言われていることからは、<sup>(15)</sup>莊宅使よりもっと上位の武德使（皇城使）をこの時点で王繼恩が加えられていることは、かなり特殊なことと言える。その武德使加官が太祖崩御と同月のことであり、果たしてそれが太祖崩御前であるのか後であるのかによって、かかる処遇がもつ意味が大きく違ってくる。

現存する史料では、武德使加官が十月何日になされたものか、明示する史料は見当たらない。現行『宋史』本伝では、武德使加官を先に記したあとに、太祖崩御を記しており、あたかも太祖存命中になされた人事であるかのようなのであるが、『宋史』に先行する『東都事略』<sup>(16)</sup>本伝では、そもそも武德使の加官そのものを記さない。しかし太祖が崩御して五日後には、王繼恩は武德使として、山陵按行副使を命じられている。<sup>(17)</sup>この間、太宗は二十四日に聴政を始めており、その日のうちに王繼恩の武德使加官が行われている可能性はあり得る。同時期の武德使として劉知信が存在し、彼は母が昭憲太後の妹で、太祖朝に両親

が亡くなったため宮中で育てられ、外戚として扱われたが、太宗即位後に武德使となっている。<sup>(19)</sup>こちらも詳細な日付は分からないため、全くの推測にならざるを得ないのだが、王繼恩とともに武德使任命がなされた可能性もなくはない。そうすると、太宗による論功行賞的な意味合いということになるのであろう。ただ、もしこの推測が正しかったとしても、太祖崩御以前に王繼恩と太宗（当時は晋王）とが何らかのつながりを持っていたということにはならない。帝位継承に際して、王繼恩が太宗即位を導いた積極的な理由は不明であるとせざるを得ない。

以上のことから分かることは、王繼恩は太宗を即位に導いた上で、さらにそれが太祖の遺志であったとして正当性を担保する存在となっていたが、彼がなぜそのような行動に出たのかを明確にすることはできなかった。本来に太祖の遺志を奉じたのか、または自己の利益を見込んで独断で行動したのかは判然としない。しかし結果的に、彼は北宋最初の帝位継承に深くかわかることとなり、太宗「定策の功」を手中にしたのである。

## 二、楚王元佐擁立計画——二代太宗から三代真宗へ

### （一）事件の経緯

太宗即位からおよそ二十年後の至道三年（九九七）三月、北宋二度目の帝位継承が発生したが、このときにも宦官が関与する事件が起きている。しかもその宦官は、またもや王繼恩であった。

初め、太宗不予、宣政使王繼恩、上〔真宗（引用者注）〕の英明を忌み、参知政事李昌齡、知制誥胡旦と楚王元佐を立てんことを

謀み、頗る上を問<sup>た</sup>つ。宰相呂端禁中に疾を問うに、上の旁に在らざるを見、疑うらくは変有らんと、乃ち笏を以て「大漸」の字を書し、親密なる吏をして上を趣<sup>うなが</sup>して入侍せしむ。太宗崩ずるに及び、継恩后に白して中書に至り端を召して立つる所を議せしめんと。端前んじて其の謀を知れば、即ち継恩を給<sup>あづか</sup>り、書閣に入りて太宗の先に賜いし墨詔を検べしめ、遂に之を鎖ざし、亟ち宮に入る。后謂いて曰く「宮車宴駕せば、嗣を立つるに長を以てするは、順なり。今將に奈何とす」と。端曰く「先帝太子を立つるは政に今日の為なれば、豈に更に異議有るを容さんや」と。后默然たり。上既に即位し、端殿下に平立して拝さず、請いて簾を捲き、昇殿して審視し、然る後に階を降り、群臣を率いて拝し万歳と呼ぶ。<sup>(20)</sup>

太宗が病床に臥せると、宦官王継恩が参知政事李昌齡、知制誥胡旦らと楚王元佐の擁立を計画した。しかし宰相呂端は太宗の看病に参内したとき、後継者たる皇太子が太宗を見舞っていないことに異変を察知し、ひそかに「大漸」(危篤)という連絡をして、太宗の枕頭に赴くよう太子を促した。そうするうちに太宗が崩御し、王継恩は宰相らを召し出して皇嗣を議論するよう李皇后に申し出をする。そして参上した呂端は、王継恩を書閣に閉じ込めて排除し、皇嗣を議論する。李皇后は年長者(元佐を指す)を立てるよう主張するが、呂端はあくまでも太子の即位を主張。こうして太子が真宗として即位したのだが、その顔が御簾で隠れていたため、大胆にも呂端は御簾を捲り上げ、その顔を確認したのちに、百官を率いて拝礼を行ったという。これで見ると、太宗から真宗への帝位継承も、かなりきわどい出来事であった

ことがわかる。

すでにこの二年前、太宗の第三子である趙恒(のちの真宗)が立太子して存在していたにもかかわらず、その兄である楚王元佐を擁立する計画があったという。しかもその計画は、内廷における宦官と、外朝の副宰相である参知政事、詔勅起草に携わる知制誥が結託していたというから、正式な手続きとして新皇帝を擁立しうる計画であった。そこに皇后もが賛意を示していたとあれば、実現可能性はかなり高かったように思われる。このような太宗の遺志を無視するかのような陰謀が成立し得たのには、その立太子の経緯に複雑な過程があったからでもあった。

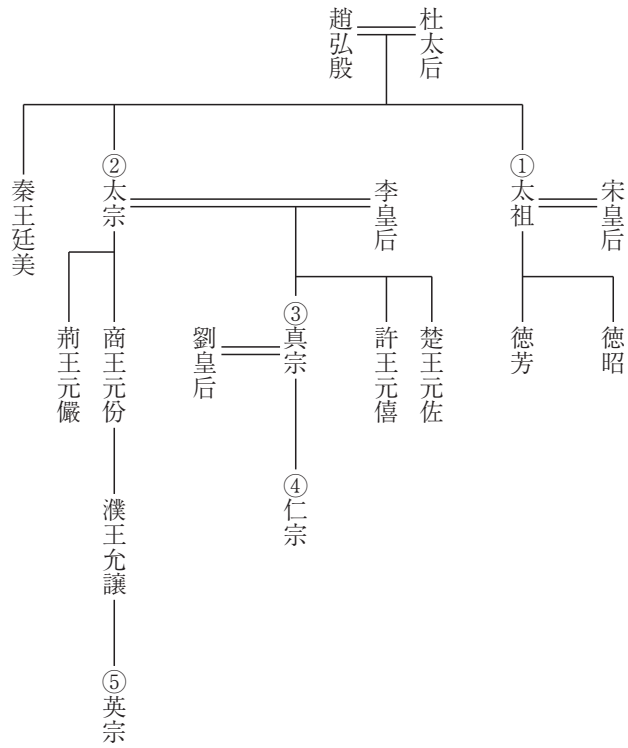
## (二) 太宗朝における後継者事情

そもそも前章で見たような、太宗に太祖弑殺の嫌疑がかけられたのは、単に「灯影斧声」の話があったからだけではなかった。太宗の即位直後、それまでの踰年改元の伝統に則らず、開宝九年十二月二十二日に、残りわずかな日数を待つことなく「太平興国」と改元したことも疑惑を深めたし、太宗の即位後、さらにその後継者と目された人物らに關して、さまざまな事件が発生したこともその原因であった。<sup>(21)</sup>

太宗即位の直後には、弟である廷美を開封尹・齊王にしているが、開封尹といえはその直前まで太宗自身が就いていた職事で、彼はまさにここを拠点として自らの政治勢力を維持してきた。<sup>(22)</sup>五代以来の習慣もあり、開封尹に皇弟廷美が就いたことは、暗に彼が後継者に擬されたと考えてよいことであった。また当時、ある話がまことしやかに伝えられており、それは、太祖・太宗・廷美の母である昭憲太后杜氏が



【北宋初期の皇室系図】



病に倒れたとき、太祖に対して弟の太宗を後継者とするよう遺命を残したといい、その真意は、帝位をさらに太宗から廷美へ、廷美から太祖の皇子である德昭へ伝えさせようとしたものだったとされる。<sup>24</sup> これはいわゆる「金匱之盟」と呼ばれるものだが、五代の混乱期から時間が経たず、まだ中華も統一されていないこのとき、幼君の出現を避けるために兄弟相続が望まれたとするものだった。その信憑性はやや怪しいものの（詳細は後述）、この兄弟相続の認識下で、当時廷美が後継者と目されていたと考えてもよいであろう。

しかしその後、情勢は不穏さを帯びてくる。廷美の次の後継者候補であった德昭とその弟である德芳が死を迎えるのである。特に德芳は前章で見たように、太祖の皇后宋氏によって一度は後継者とみなされていた人物であり、太宗朝となっても帝位継承権を所持する太宗の甥であった。德昭・德芳の兄弟は、太宗即位後に郡王・節度使に任じられ、厚遇されたかのように見えたものの、太平興国四年（九七九）には、太宗による契丹親征の敗戦（高粱河の戦い）時、德昭擁立の動きがあったため、のちに太宗に詰られ、憤った德昭は「割果刀を取りて自刎」してしまう。<sup>25</sup> その二年後には、德芳が病で死去するのだが、<sup>26</sup> これは何の前触れもない突然死であったという。これにより、太祖の皇子は全員が死去することになった。

このような情勢を受け、廷美の立場も不安定さを増してくる。<sup>27</sup> さらに筆記小説によると、太宗は開封で発生した殺人事件について、その犯人の逮捕をきつく命じたことがあった。命を受けた開封尹が逮捕し、自供した犯人について報告すると、実は真犯人はその者ではなく、殺害に使用された凶器も太宗自身の剣であり、「こんなことでは冤罪が無くならない」と太宗が慨嘆する逸話が残されている。<sup>28</sup> 陰險なやり口で廷美の政治能力にケチを付け、追い落とそうとする太宗の姿が窺える。そしてとうとう太平興国七年（九八二）、廷美が驕恣であり、陰謀が行われようとしている、という告発があり、廷美は開封尹を罷免され、西京留守としてまず洛陽に移されたあと、次いで房陵に安置となった。<sup>29</sup> 言うまでもなく、これは後継候補から外されたことを意味していた。

実は先に見た「金匱之盟」が太宗に示されたのは、この廷美失脚の

タイミングで趙普が言い出したものであった。<sup>(30)</sup>太祖ら三代に仕えた趙普であったが、当時は廬多遜らとの政争で劣勢にあったため、太宗の寵を得てこれに打ち勝つための起死回生の策として持ち出してきたのが、太宗に即位の正統性を与えるための「金匱之盟」であったとされる。結果、趙普は司徒兼侍中となったが、<sup>(31)</sup>その後も廬多遜への追及の手を休めず、彼が廷美と通じていることを告発。廬多遜は流罪となり、廷美はさらに房陵に安置となったのであった。そしてわずか二年後、廷美は雍熙元年（九八四）に病死するのである。<sup>(32)</sup>

このように皇弟・皇甥が次々と不幸な最期を迎えることになった背景に何があったか。それは、やはり太宗が自らの血統による帝位継承を目論んだことがあったのではないかと言われている。そしてその候補となった人物こそ、のち王繼恩らが擁立しようとした元佐であった。元佐は太宗の長子で、太平興国年間に衛王に封じられた後、「東宮」に居住し、楚王に封じられたという。<sup>(33)</sup>「東宮」居住ということから、おそらくは廷美に替わって後継者に擬されたのであろう。太宗は、実弟を後継者から外し、実子の後継者とすることに成功したものと考えられる。

ところが、これがうまく行かなかった。誰よりも元佐自身がその処置に納得しなかったのである。

楚王元佐は太宗の長子、将に立てて嗣と為されんとするも、堅く辞じて肯んぜず、太祖の子を立てんと欲す。此より遂に廃せらる。故に当時以て狂いたりと為すも、而れども実は狂うに非ざるなり。<sup>(34)</sup>  
初め、涪王廷美既に罪を得るに、楚王元佐独り申して之を救わんとするも、上聴かず。廷美死し、元佐遂に心疾を感じ、或いは時

を経るも朝請せず。<sup>(35)</sup>

自らが後継者たることに耐えられず、太祖の子（廷美の誤りか）への伝位、廷美の雪冤を主張したが、容れられなかったために心の病に罹ってしまったが、一説ではそれは偽りだったともいう。おそらくはそれまでの経緯を見聞きしてきたあとで、自分が安穩と後継者になることを潔しとしなかったのであろうが、そこには父・太宗のやり方に対する拒否感すら窺えるし、そうであれば父子の関係がうまくいかなくなることも自然な流れであつたろう。宋敏求は、「廷美の貶せらるるや、元佐 其の罪を請い、是より愛を失う」と言う。<sup>(36)</sup>そうした感情のもつれもあつてか、雍熙二年（九八五）には自らの王宮に火を放ち、王を廃されて庶人とされ、均州に安置となった。<sup>(37)</sup>

かくして元佐が後継者候補から外されたのち、その後に据えられたのは太宗の次子・元僖であり、雍熙三年（九八六）十月に開封尹となった。<sup>(38)</sup>その後宰相らは正式な立太子を要請したものの、太宗がしぶって実現しないまま、淳化三年（九九二）、あえなく元僖は突然死するのである。哀しんだ太宗は彼に「太子」を追贈している。<sup>(39)</sup>つくづく後継者に悩む太宗であつた。

そして白羽の矢が立てられたのが、元佐・元僖の同母弟であつた第三子元侃だつた。これがのちの真宗である。淳化五年（九九四）に開封尹となり、翌・至道元年（九九五）にはようやく正式に立太子し、趙恒と改名した。そのわずか二年後に太宗が崩御し、帝位継承の問題が発生したのである。

このような経緯を踏まえると、太宗の決めた太子恒ではなく、その兄であり、もとの後継候補であつた元佐を支持する勢力があつても不

思議ではない。そもそも太宗の後継者は、二転三転を繰り返していたし、元佐はまだ均州で存命であって、その流謫についても同情的な者は少なくなかったと思われる。母である皇后もそこに含まれていたであろう。ただしその場合、彼の病が佯狂でなければならぬであろうが。

### (三) 王繼恩と呂端——擁立計画の失敗

では、その擁立計画の主謀者のように描かれる宦官王繼恩は、太宗朝においてはどのような活動をしていたのだろうか。遙郡刺史から団練使を領するようになったあと、北方で軍事活動に従事し、都監、鈴轄を歴任していた。その中でも最も目を引く活動は、四川で発生した王小波・李順の乱(均産一揆)を軍を率いて平定し、その後も現地の占領行政を施したことである。淳化五年(九九四)劍南兩川招安使として四川に進撃し、同年五月には成都を陥落させている。<sup>(42)</sup>ここには宦官に率いられた部隊が少なからず参加しており、その元締めのような存在でもあった。乱平定後、そのまま大軍をもって現地を治めたが、残党が各地にくすぶる中、王繼恩らは成都で王侯のように音楽を奏でてもっぱら宴会を事とし、手下は略奪に走るといふ有り様だった。宦官部隊に対する偏見もあるであろうが、相当な蛮行が行われていたようである。また、このとき王繼恩はその功により「宣政使」という宦官班官を新設され、授けられているが、さらに防衛使を求める声もあったため、おそらくはこれを危険視した太宗により、招安使を交替させられ、至道二年(九九六)開封に召還されている。

このように行き過ぎた行為はあったものの、王繼恩は軍事面で太宗

朝に活躍しており、僭越な行為があっても処罰されることがなかった。その背景には、太宗即位時における「定策の功」が大きく作用していたことが想像され、まさに「寵遇比すべきものなし」であった。<sup>(43)</sup>彼は党派を組んで名利を求めることを喜び、事ごとに官僚を推薦したため、軽薄な士大夫は彼とつながりを求めたとされる。その中の一人に薬売りの潘閬という者がおり、詩をよく詠んだが王繼恩の推薦により太宗に召見され、進士を賜ったが、「狂妄」が発覚して取りやめになったという。<sup>(44)</sup>この潘閬が件の帝位継承時の陰謀に絡んでいたとされる。

太宗が崩じたとき、王繼恩はなぜ元佐を擁立しようとしたのであろうか。遺憾ながらその動機を明示する史料は見出されない。本章冒頭でみた史料では、のちの真宗である太子の「英明を忌」んだためだとするが、かかる表現は定型句ともいえるものである。実際のところは、それまでの経緯による元佐への同情か、あるいは元佐の復権・即位を希望する李皇后と結んだものか、または先代のときと同じように、既定路線である太子以外の者を擁立することによって、再び「定策の功」を得ようとする個人的な野望であろうか。ここで一つ興味深い話が伝えられている。先に出てきた薬売りの潘閬による教唆があったとするものだ。

(潘)閬なる者は、傾險の士、嘗て繼恩に説きて間に乗じて太宗に勧めて儲武を立てしめ、它日の計と為さんと。且て言えらく「南衙自ずから謂えらく当に立つべしと。之を立てるも、將に我を徳とせず。即ち立つる所を議せば、宜しく諸王の当に立つべからざる者を立つるべし」と。南衙は上(真宗(引用者注))を謂うなり。繼恩其の説を入れ、頗る太宗を惑わすも、太宗訖に上



を立つ、閭尋いで狂妄に坐して黜けらる。<sup>(45)</sup>

これはまだ真宗が太子に立てられる前のことであろうが、後継者として自他ともに認められた者以外を立てることを勧めている。まさしく「定策の功」を得るためというのである。このとき一体誰を立てようとしたのか明記はされないが、その目論みは失敗し、結局は太宗が崩じたのちに、元佐を擁立する陰謀が行われたのであろう。<sup>(46)</sup>

この擁立計画に対し、宰相の呂端のみが皇后をも向こうに回して頑然とこれに抵抗し、太子（真宗）の即位を導いたのだった。しかし最後の場面、御簾をあげて真宗の顔を確認した上で、ようやく万歳を叫んだという行動は、最後の最後まで別人が立てられかねない、非常に緊迫した状況下で帝位継承がなされたことを意味している。

この呂端は王継恩との間にある因縁があったことが分かっている。それは元佐の次に後継者候補となった元僖に関わる問題である。元僖が開封尹となって数年で突然死したことはすでに述べたが、その際、生前実は元僖が張氏という嬖妾に惑わされ、侍者らを虐待するなどの振る舞いがあったとか、あるいは何かを食べて突然病となった、などという奥向きの私事についての醜聞が広まり、それに怒った太宗が王継恩らに取り調べを命じた。<sup>(47)</sup>その際多くの関係者が処罰を受けたのだが、そのとき開封府判官であった呂端も王継恩らの訊問を受け、左遷されている。<sup>(48)</sup>おそらくはせっかく後継者として定まった元僖を失い、意気消沈した太宗が亡き息子の醜聞に抱いた怒気を受けて、王継恩らは公正ではない裁定をしたものと考えられる。この経緯は、のちに呂端が宮中勢力を全く信用しない行動を取る遠因にもなっていたと思われる。

結局、なんとか真宗が即位してから、わずか二ヶ月後の至道三年（九九七）五月、李昌齡・王継恩・胡旦らはまとめて処罰され、王継恩は均州に安置となって財産は没収。その多くは四川で獲得した「僭侈之物」であったという。そしてそのまま貶所で死去した。<sup>(49)</sup>

太宗にきちんとした太子が存在したにもかかわらず、別人が立てられようとした陰謀は、こうして失敗に終わったのであるが、李燾によれば、この事件もまた『実録』『国史』に記載されていない出来事であるという。<sup>(50)</sup>

### 三、太子監国計画——三代真宗から四代仁宗へ

#### （一）事件の経緯

真宗が即位してから二十年。この間は何といっても契丹の侵入から澶淵の盟の締結、つづく天書降臨から封禅を含む道教的儀礼の数々があつて、<sup>(51)</sup>北宋王朝として非常に多事多端な時期であった。それが過ぎた天禧四年（一〇二〇）、

大中祥符末、上始めて疾を得、是の歳仲春、苦しむ所浸く劇し、自ら起たざるを疑い、嘗て臥すに懷政の股を枕とし、之と謀み、太子に命じて監国せしめんと欲す。懷政実には左右春坊の事を典り、出でて寇準に告ぐ。準遂に請問して建議し、密かに楊億をして草奏せしむ。已にして事泄れ、準相を罷めらる。<sup>(52)</sup>

すでに四〜五年前から病んでいた真宗が重篤となり、もう立てないと覚悟すると、宦官周懷政の股を枕に寝ていた真宗が、太子の監国を希望した。周懷政は宰相寇準に相談し、寇準から真宗に密かに建議をした結果、おそらくは聖旨を取り、翰林学士であった楊億に詔書を起

草させたが、計画は露見してしまい、寇準は宰相を罷免されたという。これが事件の第一段階である。この第一段階は、健康不安から真宗を引退させ、太子が監国となって政務を代行させる計画であった。つづいて、

丁謂等因りて懷政を疎斥し、親近するを得ざらしめ、然れども上及び太子の故を以て、未だ即ちには顕らかに黜責を加えず。懷政憂懼して自ら安んぜず、陰かに謂等を殺さんと謀り、復た準を相とし、帝を奉りて太上皇と為し、位を太子に伝え、而して皇后を廢さんと。其の弟礼賓副使懷信と潜かに客省使楊崇勲、内殿承制楊懷吉、閤門祇候楊懷玉を召して其の事を議し、期するに二十五日を以て窃かに發さんとす。<sup>(53)</sup>

太子監国計画が不首尾に終わったあと、寇準の政敵であった樞密使丁謂による処罰を恐れた周懷政が、丁謂の殺害、寇準の復権、真宗の退位、太子の即位、皇后の廢立を計画し、宦官らとともに二十五日に実行に移すことを期したという。これが事件の第二段階における計画である。

是に前んずる一夕、崇勲、懷吉は夕べに謂の第に詣りて変を告げ、謂 中夜に微服にて婦人の車に乗り、曹利用に過りて之を計り、明くるに及び、利用入りて崇政殿に奏す。懷政時に殿の東廡に在り、即ちに衛士をして之を執えしむ。<sup>(54)</sup>

ところが実行前日の夕暮れ、共謀の宦官が丁謂に告発したため、深夜に丁謂は曹利用と相談し、翌日早朝、曹利用が崇政殿で上奏した際、周懷政が殿の東廡で拘束されたという。その後、周懷政に対して御薬院で取り調べが行われ、数時間たたぬうちに罪状が成立し、真宗が

承明殿で臨問した。このとき周懷政はひたすら命乞いするだけであったが、普安仏寺に移送されて処刑された。<sup>(55)</sup>これが事件第二段階の結末である。

以上がこのとき発生した、北宋三度目の帝位継承にまつわる事件であるが、病気である真宗の退位はともかく、宦官である周懷政が、最終的には大臣の殺害、皇后の廢立をたくらむという大事件であった。この事件の背景には、寇準と丁謂の政争、劉皇后による政治介入という事態があり、これまでも先行研究でさまざまな分析がなされてきた事件である。<sup>(56)</sup>いま改めて宦官らの行動に注目し、この事件について考えてみたい。

## (二) 寇準と太子監国計画

史料によれば、この計画は真宗の引退の意思から始まったということとであり、太子の監国、あるいは即位を目したものであるから、別人を擁立しようとした前章までの事例とはやや異なるものの、しかし帝位継承に関連した事件であった。その発端は周懷政と寇準のつながりから展開されているが、両者にはその直前に結びつきがあったとされる。

もともと寇準は真宗朝において澶淵の盟締結を導いた功臣であったが、二度失脚し、天禧年間には判永興軍となつて地方にいた。そこで登場するのが、朱能という人物である。朱能はもともと田敏という人物の家の下僕であったが粗暴狡猾な性格で、賄賂を使って、当時内副都知として日々内廷に侍っていた周懷政に面会する機会があった。

そこで不思議話が好きな周懷政に取り入り、推薦されて御薬使・階州

刺史に取り立てられたという。その後、終南山の道観に入つて妖しげな符命を作つたり、神靈にかこつけて国家の禍福や大臣の能否を談じていた。<sup>(57)</sup>その朱能が永興軍の巡検となつており、今度は寇準に取り入ることに成功したのだという。そして寇準は、領内の乾祐山に天書が降つたと上奏するのだが、これは朱能が教唆したものだとされている。<sup>(58)</sup>言うまでもなく天書とは、天から降されたと称する符瑞の書を意味し、かつてこれをきつかけとして一連の道教儀礼が実施された、真偽の怪しい代物であつたが、符瑞を信じやすい真宗に対しては大きなアピールとなり得るものであつた。このとき「時に巡検朱能、内侍都知周懷政を挟みて詐りて天書を為る」とされるように、朱能が周懷政とのつながりをも利用するかたちで天書を捏造し、真宗へのアピールに使つたという。翌月、寇準は都に召還され、やがて宰相に復帰を果たした。この話を信じれば、朱能を間に挟むかたちで、周懷政は寇準の宰相復帰を後押ししたことになる。

一方、当時の朝廷では、先に見たように真宗が長年病氣に倒れ、実際には劉皇后によつて政事決断がなされていた。そもそも真宗が健在であるときから、

凡そ宮闈の事を処置するに、多く故実を引援し、適当ならざる者無し。帝朝より退き、天下の封奏を閲て、多く中夜に至るに、<sup>(59)</sup>后

皆之を預聞す。周謹恭密にして、益ます帝の倚信する所と為る。<sup>(60)</sup>とある如く政事に関与しており、真宗が倒れてからは、「時に上不予にして、語言に艱ければ、政事多く中宮の決する所なり」という状態であつた。この劉皇后による政事関与は、いわば真宗の名代としてのそれであるから、より正規の皇帝名代である「監国」に、どのような

形で太子が就任するかということは、皇后の政治的立場に直結する問題であつた。

このような情勢の中、宰相に復帰した寇準だったが、朝廷内では執政の丁謂とそりが合わず、その丁謂は劉皇后と親しい上、寇準はかつて皇后の冊立に反対した過去があり、今また蜀の塩井を他人から強奪した皇后の族人を厳しく処罰したこと、皇后との間に大きな溝ができていた。<sup>(61)</sup>そうした中でこの太子監国の計画である。太子が政務全般をみるのか、はたまた皇后と政務を分担するのか、具体的な内容は不明であるものの、寇準は真宗に対して「隙を見て上奏建議し、ひそかに楊億に起草させた」(「請問建議、密令草奏」というのは、一体誰を憚つてのものか。正規に皇帝の聖旨を得たものであれば、堂々と起草してよいはずである。なぜ密かに詔書を起草しなければならぬのか。それは劉皇后に察知されることを避けるため以外にはあり得ない。現状、実権を握つていた皇后に知られると、内廷にあつて真宗の意思を覆される可能性もあるし、そもそも気弱で病床にあつた真宗では心許ない。だからこそ楊億は、

億事の泄るるを畏れ、夜、左右を屏けて之が辞を為り、自ら起ちて灯跋を剪るに至る、中外に知る者無し。<sup>(62)</sup>

とまで警戒をしていたのである。そこまでするからには、太子監国の内容も想像がつく。単に太子が政務に携わるだけではなく、皇后の政務関与停止をも含んでいたであろう。

ところがそこまで慎重を期していたにもかかわらず、計画は漏れてしまった。あろうことか、寇準自身が酒に酔つて人に計画を話してしまったのだ。それを知つた丁謂は真宗に対して寇準の罷免を要求し、

病で耄碌した真宗は先の寇準との遣り取りを忘れ、これを許した。こうして聖旨を得た丁謂は、翰林学士の銭惟演に詔書を起草させ、寇準は宰相を罷免されたという。太子監国は阻止されたのである。

このときの監国計画は、互いに真宗の（それぞれ相反するような）聖旨を得た上で、それぞれ翰林学士（楊億と銭惟演）による詔書起草の段階まで至ったもので、完成した詔書が降出される先後によって勝負が分かれるという、これまた際どい勝負であった。史料からは、ほぼ同時進行となった起草自体は、実は楊億の方が早かったように見えるが、慎重を期した楊億のそれがどこで行われたのか分からない一方、遅れた銭惟演の起草は翰林学士院で作成されたと思われるため、作成後の詔書の発出、宣麻が早かったということであろうか、寇準罷免が先に施行されたのである。

ただ寇準は宰相を罷免されたものの、太子太傅・萊国公とされて開封には留まり、翌月には真宗に招かれて後苑で宴に参加している。<sup>(64)</sup> またその数日後には、寇準に立場の近い参知政事李迪が、空席となった宰相位に就けられるなど、<sup>(65)</sup> 真宗の寇準への待遇は変わらなかった。一方で、寇準と鋭く対立しはじめていた丁謂・曹利用・銭惟演らに対しても、特に銭惟演の意見を聞きいれるかたちで、丁謂が李迪よりの上の首相に任じられ、曹利用も枢密使に同平章事を加えられるなど重用がなされ、<sup>(66)</sup> このときの真宗は、寇準党と丁謂党の両方を登用するかたちでバランスを取ろうとしていた。あるいは病のために、どちらつかずの政策を取っただけなのか、判断に苦しみところである。

いずれにせよ、この間両陣営は互いの非難を上奏の場で繰り広げており、<sup>(67)</sup> 対立は一層厳しさを増していた。このときに発生したのが、第

二段階の宦官周懷政らによるクーデタ計画であった。

### （三）周懷政とクーデタ計画

もともと周懷政は、宋初の対北漢戦時の戦災孤児であったが、宦官周紹忠に救われてその養子となった。<sup>(68)</sup> やがて禁中に出仕し、真宗朝において泰山封禅をはじめとする一連の道教儀礼の中で様々な職務をこなすと、真宗の信頼厚かった劉承規の後を継いで拔擢され、<sup>(69)</sup> 入内押班・勾当皇城司となった。その後、同管勾大内事や刻玉都監など務めたが、太極観や寿丘宮観の都監、修奉宝冊都監など、おそらくは真宗の宗教的信仰の側面に関わる施設・儀礼を担当することが多かったようである。玉清昭応宮都監となったときには、別の宦官王承勛が同都監に任じられているが、それは都監となれば交替で現地の宮観に泊まり込まねばならなかったところ、「懷政常に禁中に在るが故に一員を増す」という理由からであり、<sup>(70)</sup> つまり常に禁中で真宗に近侍していたのであろう。

と同時に、大中祥符九年（一〇一六）には太子講学の間所として資善堂建設の都監となり、<sup>(71)</sup> 仁宗の立太子と同時期に入内副都知・管勾左右春坊となつていことから、<sup>(72)</sup> 真宗は自らの信頼する宦官を、大事な一人息子の太子親近の宦官とするべく期待していたと思われる。本章冒頭で見た事件の発端において、真宗は周懷政の股を枕に寝ていたし、第一段階が失敗に終わって寇準が失脚した後も、周懷政は「上及び太子の故を以て」処罰されなかったというから、丁謂よりも容易に手が出せないほど、真宗と太子（仁宗）から信頼を寄せられていたと考えられる。



そんな周懷政が、丁謂ら（というよりもおそらくは劉皇后）による攻勢に危機感を感じ、真宗の退位・太子の即位を目論んでクーデタ計画を練ったというのである。<sup>(73)</sup>おそらくはそれぞれの退位・即位よりも、丁謂の殺害、皇后の廢立が主目的だったと思われるが、さて、それではこのクーデタに成功の見込みはあったのだろうか。

まず、残された史料によれば、クーデタの同志は周懷政の弟である周懷信らをはじめとする宦官四人しかおらず、彼らがどの程度実力行使可能な状況にあったのか判然としない。ただ『宋史』本伝の記述では、彼らは「皇城司に会した」と言っており、<sup>(74)</sup>秘密警察である皇城司を使って、宮中において丁謂らの拘束（殺害）を図った可能性はある。しかし都において軍事力を握る三衙の侍衛馬軍と殿前司の指揮権は、劉皇后の「外戚」である劉美によって抑えられており、もしそのようなクーデタを成功させるためには、真宗と太子の身柄を宮中で確保しておくことが絶対条件だと考えられる。しかしクーデタ発動予定の当日、丁謂に近い曹利用が何事もなく出仕して真宗に入対できており、<sup>(75)</sup>しかもそのときに周懷政は唯々諸々と東廡で身柄を拘束されていることから、彼らが禁卒・衛士らを掌握できているようには思えず、クーデタ当日といった緊張感が感じられない。これで本当にクーデタを実行しようとしていたのであろうか。

#### （四）劉皇后とクーデタ計画

一方でこのとき劉皇后の側には、ぜひとも太子を自らの「掌中の玉」として抱き込む必要性があった。病が重くなってきた真宗の先行きは不安であるし、それどころかすでに実権を握っていた劉皇后に對

して、

上久しく不予、語言或いは錯乱し、嘗て盛んに怒りて輔臣に語りて曰く「昨夜皇后以下皆な劉氏に之き、独り朕のみ宮中に留まれり」と。衆皆な敢えて応ぜず。<sup>(76)</sup>

と、会話が錯乱状態になっていた真宗が怒りながら言っており、そのような話が伝われば、皇后としては自らの権力の淵源を真宗に求めることに限界を感じ、何としてもその代わりとして太子を掌握しておく必要が生じていたに違いない。

さらに加えて問題なのは、太宗の第八子で真宗の弟にあたる「八大王」元儼の存在である。幼い太子と成人の叔父という関係は、かつての徳昭・徳芳と太宗との関係と同じであり、兄弟相続が実行された「祖宗」の例がある。そんな皇位継承の可能性ある元儼は、兄である真宗の看病を口実に禁中に長居し、宰執らは憂慮したという。万一、元儼即位という事態が生じれば、皇后が政務に関与することは難しい。<sup>(77)</sup>このような状況的・時間的制約の下、皇后には一刻も早く太子を抱き込む必要があった。しかし現実には、太子の傍には真宗によって周懷政が付けられており、彼個人と劉皇后との関係性は不明であるものの、寇準に近い周懷政は目障りであつたろう。しかも第一段階の太子監国の陰謀を制圧し、首尾良く寇準に宰相を罷めさせられたものの、彼はまだ真宗の支持を得て都に残留しており、その一党も一掃することではできていなかった。依然として彼らの真宗・太子への影響力は残されたままなのである。

この状況が一転するのが、第二段階のクーデタ計画露見であつた。先に見たように成功可能性が低いと目されるクーデタ鎮圧をきっかけ



に、真宗による周懷政への信頼を崩すことに成功し、周懷政を処断することができた。この取り調べが御薬院であったというのも興味深い。かつて論じたように、御薬院という宦官官職と劉皇后には深いつながりがあった。<sup>(79)</sup>そこで取り調べを担当したのは、宣徽北院使の曹瑋と、当初クーデタ計画に参加し、その後丁謂に告発に走った二人の宦官のうちの一人、楊崇勲であった。通常なら関係者として取り調べの対象となってもおかしくなく、よくても参考人であるはずの彼が、なぜ取り調べる側に回っているのだろうか。そしてすでに述べたように、取り調べのあと数刻ならずに嫌疑が固まり、周懷政は真宗直々の取り調べを受けたが、そのとき周懷政はただただ命乞いするばかりであったという。はたして彼はそのとき、まともな会話ができる状態であったのだろうか。これはのちの、党争がより激しくなった時期の詔獄においてであるが、哲宗朝の掖庭詔獄では、宦官や宮女が厳しい取り調べ・拷問を受け、息がたえだえ、体はボロボロ、ある者はすでに舌が無かったともいわれる。<sup>(80)</sup>このとき周懷政が真宗に何も言わなかったのは、自らのクーデタ計画が失敗して観念したから、とのみ理解するのは早計であろう。

結局、周懷政は即日処刑され、わずか三日後に寇準は都から外に出された。<sup>(81)</sup>第一段階のあとではなしえなかった寇準一党の追放は、このときに実現された。クーデタ計画の失敗によって最も利を得たのは、丁謂とその背後にいる劉皇后であった。太子の監国もその三ヶ月後に実現している。監国体制自体が劉皇后の望まぬものではなかったことは、もはや明白であった。要するに皇后の望むような政務分担の形で監国体制が必要だったのである。事実認識に誤りがあるとして李燾

は本文に採用していないが、『記聞』が、

皇后命じて懷政を収めて獄に下とし、並びに宮中に萊公伝位を奏言するの事を得れば、乃ち楊崇勲に命じて変を告げしめ、懷政を誅し、萊公を貶す。<sup>(82)</sup>

と記し、皇后が楊崇勲を使つて告発をさせたというのは示唆的である。つまりは周懷政がそのような計画を立てていたという誣告をさせ、自作自演的に陰謀をでっち上げ、それを機に自らの望むような政治状況に持つて行つたと考えることもできるのである。

のち劉太皇太后が崩じて仁宗の親政が始まつた景祐元年（一〇三四）、周懷政の弟懷信が、

兄の懷政、天禧中に東宮に給事し、最も親信を取らる。姦臣の皇嗣を危うくせんと謀むや、心に忠憤を懷き、儉党を除かんと議するも、崇勲及び楊懷吉に誣告せられ誅を被る。今懷吉死すると雖も、而れども崇勲尚お將相に居れば、乞うらくは其の事を正して、以て幽魂を慰められん。

と上言して、これが容れられ、楊崇勲が子とともに左遷されたあと、<sup>(83)</sup>まもなく周懷政の名譽が回復されていることは、一体何を意味しているであろうか。<sup>(84)</sup>

このように当時の状況を深く読み込んでみれば、第二段階のクーデタ計画が実際にあったものかどうか、よく考慮してみなければならぬものの、当時、帝位継承をめぐる争いの中で、周懷政が大きな役割を果たしていたということは変わりない。これまでの先行研究では、もっぱら寇準と丁謂・劉皇后の動きにばかり注目が集められ、周懷政はその協力者としてのみ触れられる程度であった。しかし彼を中心と

した宦官による宮中クーデタが計画された、あるいはその蓋然性があると考えられた当時の政治状況に、より注目すべきではないだろうか。

## おわりに

以上見てきたように、太宗の嗣位から仁宗の即位に至るまでの間、北宋初期に三度あった帝位継承にはさまざまな暗闘が存在しており、そのいずれにも宦官が深く関与していた。帝位継承は多く宮中（禁中）で発生するため、宦官が絡んでくるのは当然といえば当然であるし、本稿で見たものも、総体としての宦官勢力というよりも、言ってみれば王継恩・周懷政の二名があくまでも個人的に関与したものだと言えないこともない。しかし、いずれも単に外朝勢力との協力者といった消極的な関わりではなく、計画の主謀者であったり、時にキャスティングボートを握るところまでいっており、その動向を無視しないものであった。

由来、宋代においては宦官らの政治的関与は非常に限定的で、いわゆる「内朝」は存在しえなかったと言われ、研究の主眼もむしろ科挙士大夫らの動向に置かれ、宦官らについては軽視されがちであった。宋代を総体として見、他の朝代と比べてみたとき、そのような見方は大きくは誤っていないものの、だからといって「内朝」が政治的に何らの影響力も持っていなかったと考えるのは早計ではなからうか。特に本稿でみたように、政事の根幹に関わる帝位継承に宦官が深く関わっていたことは、もっと注目してよい現象であろう。

では、特にこの北宋初期における帝位継承に宦官が関与していたことをどう捉えるべきだろうか。一つ考えられるのは、この宋初という

時期はまだ五代の乱世の延長上にあり、社会的にも殺伐とした雰囲気が残存していた。<sup>(86)</sup>太宗が招来した、科挙官僚を主軸とする文治主義の体制はまだ軌道に乗っておらず、本稿でも登場した寇準・丁謂らのような科挙官僚による党争の萌芽がようやく見られるのが真宗朝であり、范仲淹に代表されるような科挙官僚による士大夫政治<sup>(87)</sup>「君主独裁制」が成立するのはこれより後のことである。これを踏まえれば、この宋初においては、まだ唐末五代と同じく、宦官も科挙官僚も後宮勢力も、どれもが一つの政治勢力として角逐していた時期だったと考えられる。そうした状況の中にあつたのが、この時期の帝位継承と宦官の関与であつたといえるのではないだろうか。

## 註

(1) 代表的なものを挙げれば、次のようなものがある。

宮崎市定「宋の太祖被弑説について」『宮崎市定全集』一〇、

岩波書店、一九九二年。初出は一九四五年。

愛宕元「宋太祖弑害説と上清太平宮」『史林』六七―二、一九八四年。

李裕民「掲開斧声灯影之謎」『山西大学学报』一九八八―三。

侯建方「宋太宗継統考実」『復旦大学学报』一九九二―二。

蒲章臻「灯影斧声」『金匱之盟』宗室政策視角下的太宗継位問題」『池州学院学报』二〇二〇―四。

(2) 李燾「統資治通鑑長編」(以下、「長編」と略称)巻一七・開宝九年十月癸丑条。

(3) 宋代における帝位継承時に、先代の皇后が果たした役割の大きさを考察した研究に秦玲子「宋代の后と帝嗣決定権」(『中国伝統社会と家族―柳田節子先生古稀記念』汲古書店、一九九三年)があるが、このときのこととして、太宗は自らの力で「自立」したものだとしている(六二―六三頁)。

- (4) 拙稿「宦官官職としての宋代御薬院」、『清泉女子大学人文科学研究所紀要』三九、二〇一八年。
- (5) 『長編』卷一七・開宝九年十月壬子条。
- (6) 張明華『宋太宗与北宋初幾部官修史書的形成』、『史学研究』二〇〇四—四。
- (7) 李攸『宋朝事実』卷七。  
建隆初、太祖遣使詣真源祠老子、于京城修建隆觀、觀在闕闔門外。周世宗建曰太清觀、帝命重修賜今名。自是齋修率就是觀。自五代以来道流庸雜。
- (8) 『長編』卷一七・開宝九年十月壬子条。
- (9) このあたりの考証については、前掲注(1)愛宕論文五四—五五頁参照。
- (10) 以下の内容は、『宋史』卷二二五・宦者列伝・王繼恩伝を参照。
- (11) 先の「内侍行首」も「裏面内班小底都知」も、具体的にどのような官職であるのかはつきりしない。北宋建国まもないこの頃、宦官の官職もまだ整備されていなかったことが原因であろう。おそらくはのちの「入内内侍省都知」などに相当するものと推測する。
- (12) 『新唐書』卷二四・車服志。
- (13) 司馬光『涑水記聞』卷一。  
太祖嘗罷朝、坐便殿、不樂者、久之、内侍行首王繼恩請其故。上曰「爾謂天子為容易耶。早來吾乘快指揮一事而誤、故不樂耳。」孔子称「如知為君之難也、不幾乎一言而興邦乎。」太祖有焉。
- (14) 『宋史』卷二二五・宦者列伝・王繼恩伝。  
(開宝)九年春、改裏面内班小底都知、賜金紫。十月、加武德使。太祖崩、副杜彥圭案行陵地、尋充永昌陵使。  
徐松『宋会要輯稿』(以下、『宋会要』と略称)礼二九—一。  
開宝九年十月二十日、太祖崩於万歲殿。
- (15) 『長編』卷二六・淳化五年八月癸巳条。
- (16) 王偁『東都事略』卷一一〇・宦者列伝・王繼恩伝。
- (17) 『宋会要』礼二九—一。
- (18) (開宝九年十月)二十五日、命翰林使、饒州団練使杜彥圭為山陵按行使、武德使王繼恩副之。内出遺留物賜近臣有差。  
『宋会要』礼二九—一。  
(開宝九年十月)二十四日、大斂成服、宰臣薛居正前跪奏請聽政、制可之。翌日、移御長春殿。
- (19) 『宋史』卷二二一・外戚伝・劉知信伝。  
太宗即位、進領本州団練使、拜武德使。從征河東、又為行宮使。
- (20) 『長編』卷四一・至道三年三月癸巳条。
- (21) 滝野邦雄氏は、当時の改元事情を改めて確認した上で、これは冬至における南郊儀礼とそれにとまなう改元を行ったものであり、當時としては違和感がなかったと述べる(滝野邦雄「宋・太宗の太平興国の改元について」、『和歌山大学経済学会研究年報』一四、二〇一〇年)。
- (22) 『長編』卷一七・開宝九年十月庚申条。  
以皇弟永興節度使、兼侍中廷美為開封尹、兼中書令、封齊王。
- (23) 見城光威「宋太宗政權考(上)」、『東北大学文学研究科研究年報』五五、二〇〇五年。
- (24) 『宋史』卷二四四・宗室伝・魏王廷美伝。  
初、昭憲太后不予、命太祖伝位太宗、因顧謂趙普曰「爾同記吾言、不可違也。」命普於榻前為約誓書、普於紙尾書云「臣普書、藏之金匱、命謹密宮人掌之。或謂昭憲及太祖本意、蓋欲太宗伝之廷美、而廷美復伝之德昭。
- (25) 『長編』卷二〇・太平興國四年八月甲戌条。  
初、武功郡王德昭從征幽州、軍中晝夜驚、不知上所在、或有謀立王者、会知上处、乃止。上微聞其事、不悅。及婦、以北征不利、久不行太原之賞、議者皆謂不可、於是德昭乘間入言、上大怒曰「待汝自為之、賞未晚也。」德昭惶恐、還宮、謂左右曰「帶刀乎。」左右辭以宮中不敢帶。德昭因入茶酒閣、拒戸、取割果刀自刎。上聞之、驚悔、往抱其尸、大哭曰「痴兒、何至此耶。」追封魏王、諡曰懿。
- (26) 『宋史』卷二四四・宗室伝・秦王德芳伝。

六年三月、寝疾薨、年二十三。車駕臨哭、廢朝五日。贈中書令、岐王及諡。

(27) 『宋史』卷二四四・宗室伝・魏王廷美伝。

德昭不得其死、德芳相繼夭絶、廷美始不自安。

(28) 蔡條『鉄圉山叢談』卷一。

太宗始嗣位、思有以帖服中外。一日、輦下諸肆、有為丐者不得乞、因倚門大罵為無賴者。主人遜謝、久不得解。即有數十百眾方擁門聚觀、中忽一人躍出、以刀刺丐者死、且遺其刀而去。会日已暮、追捕莫獲。翌日奏聞、太宗大怒、謂是猶習五季乱、乃敢中都白昼殺人。即嚴索捕、期在必得。有司懼罪、久之、跡其事、是乃主人不勝其忿而殺之耳。獄將具、太宗喜曰「卿能用心若是、雖然、第為朕第一覆、母枉焉。且携其刀來。」不数日、尹再登對、以獄詞並刀上。太宗問「審乎。」曰「審矣。」於是太宗顧旁小内侍、取吾鞘來。小内侍唯命、即奉刀内鞘中。因扞袖而起、入曰「如此、寧不妄殺人。」

(29) 『宋史』卷二四四・宗室伝・魏王廷美伝。

七年三月、或告秦王廷美驕恣、将有陰謀窃発。上不忍暴其事、遂罷廷美開封尹、授西京留守、賜襲衣、通犀帶、錢千万緡、絹綵各万匹、銀万両、西京中第一区。

(30) 何冠環「金匱之盟真偽新考」『暨南大学学報』一九九三—三。

王育濟「金匱之盟真偽考」『山東大学学報』一九九三—一。

(31) 『長編』卷二一・太平興国六年九月丙午条。

太子太保趙普奉朝請累年、盧多遜益毀之、鬱鬱不得志。普子承宗、娶燕国長公主女。承宗適知潭州、受詔歸闕成婚、礼未踰月、多遜白遣婦任、普由是憤怒。会如京使柴禹錫等告秦王廷美驕恣、将有陰謀窃発。上召問普、普對曰「臣願備樞軸以察姦變。」退、復密奏「臣聞旧臣、為權倖所沮。」因言昭憲顧命及先朝自愬之事。上於宮中訪得普前所上章、并發金匱、遂大感寤、即留承宗京師、召普謂曰「人誰無過、朕不待五十、已知知四十九年非矣。」辛亥、以普為司徒、兼侍中。

(32) 『宋史』卷二四四・宗室伝・魏王廷美伝。

会趙普再相、廉得盧多遜与廷美交通事上聞。上怒、責授多遜兵部尚書、下御史獄。：趙普以廷美謫居西洛非便、復教知開封府李符上言「廷美不悔過、怨望、乞徙遠郡、以防他變。」詔降廷美為涪陵県公、房州安置。：雍熙元年、廷美至房州、因憂悸成疾而卒、年三十八。

(33) 『宋史』卷二四四・宗室伝・漢王元佐伝。

太平興國中、出居内東門別第、拜檢校太傅、同中書門下平章事、封衛王、赴上于中書。後徙居東宮、改賜今名、加檢校太尉、進封楚王。

(34) 蘇轍『龍川別志』卷上。

(35) 『長編』卷二一・雍熙二年九月条。

(36) 『長編』卷二一・雍熙二年九月条原注。

司馬光『日記』載宋敏求云、廷美之貶、元佐請其罪、由是失愛。日記蓋得其実也。

(37) 直接的には、この年の重陽の宴に呼ばれなかつた元佐が、自暴自棄になつて放火したという。

『長編』卷二一・雍熙二年九月庚戌条。

重陽、召諸王宴射苑中、而元佐以疾新起、不預。至暮、陳王元佑等過之、元佐謂曰「汝等与至尊宴射、而我不預焉、是為君父所棄也。」遂發憤、中夜、閉媵妾、縱火焚宮。……遂下制廢為庶人、送均州安置。

(38) 『長編』卷二二・雍熙三年十月甲辰条。

以陳王元僖為開封尹、兼侍中。

(39) 『長編』卷三三・淳化三年十一月己亥条。

開封尹、許王元僖早朝、方坐殿廡中、覺体中不佳、遂不入謁、徑歸府。車駕遽臨視、疾已亟、上呼之、猶能応、少選薨、年二十七。上哭之慟、左右皆不敢仰視。追贈太子、諡曰恭孝。

(40) 『長編』卷三六・淳化五年九月壬申条。

以襄王元侃為開封尹、改封寿王、用寇準之言也。

(41) 島居一康「王小波・李順の乱の性格―宋代四川の地主佃戸制との関連において」『東洋史研究』二九—一、一九七〇年。



丹喬二「宋初四川の王小波・李順の乱について―唐宋変革の一問題」『東洋学報』六一―三・四、一九八〇年。

(42) 以下、このときの模様については、楊仲良『統資治通鑑長編紀事本末』巻一三「李順の変」を参照。

(43) 『長編』巻四一・至道三年五月甲戌条。

(44) 太宗之即位也、繼恩有力焉、太宗以爲忠、自是寵遇莫比。

曾鞏『隆平集』巻二。

布衣潘閔、常充葉京師、好結交上左右、有言其善吟詩者。至道初、召對、賜進士出身、國子四門助教、未幾、追還所賜。(潘君行徑正是後來隱士宗派。)

『長編』巻三七・至道元年四月丙申条。

賜布衣潘閔進士及第。未幾、追還詔書、以閔所爲狂妄故也。

また、晁公武『郡齋讀書志』巻四中に「潘道遥詩三卷」があり、潘閔についても記述がある。

(45) 『長編』巻四一・至道三年五月甲戌条。

(46) 王明清『揮麈錄』余話巻一では、擁立しようとしたのは太祖の孫で、德昭の子である惟吉だとする。

太宗大漸、繼恩乃与参知政事李昌齡、枢密趙鎔、知制誥胡旦、布衣潘閔謀立太祖之孫惟吉。適洩其機、呂正惠時爲上宰、鎖繼恩、而迎真宗於南衙、即帝位。繼恩等尋悉誅竄。

(47) 『宋会要』帝系二・淳化三年十一月己亥条。

未幾、人有言元僖爲嬖妾張氏所惑、專恣、極僕妾有至死者、而元僖不知。爲張氏于都城西仏寺招魂葬其父母、僭差踰制。又言元僖因誤食他物得病、及其宮中私事。上怒、命縊殺張氏、捕元僖左右親吏繫獄、令皇城使王繼恩驗問、悉決杖停免。

(48) 『宋史』巻二八一・呂端伝。

許王元僖尹開封、又爲判官。王薨、有發其陰事者、坐禪贊無狀、遣御史武元穎、内侍王繼恩就鞠于府。端方決事、徐起候之、二使曰「有詔推君。」端神色自若、顧從者曰「取帽来。」二使曰「何遽至此。」端曰「天子有制問、即罪人矣、安可在堂上對制使。」即下堂、隨問而答。左遷衛尉少卿。

(49) 『長編』巻四一・至道三年五月甲戌条。

戸部侍郎、参知政事李昌齡、責授忠武節度行軍司馬。宣政使、桂州觀察使王繼恩、責授右監門衛將軍、均州安置。安遠節度行軍司馬胡旦、削籍流潯州。……上既即位、加恩百官、繼恩又密託旦爲褒辭。旦已先坐絀、于是并逐三人者。詔以繼恩潛懷凶慝、与昌齡等交通請託、漏洩宮禁語言也。籍繼恩家貲、多得蜀主僭侈之物。尋詔中外臣僚曾与繼恩交結及通書疏者、一切不問。後二年、繼恩死于貶所。

(50) 『長編』巻四一・至道三年三月癸巳条原注

王繼恩等謀廢立、『実録』、『国史』絶不見其事迹、蓋若有所隱諱。今捫呂誨集『正惠公補伝』及司馬光『記聞』增修、『補伝』所載、比之『記聞』尤詳也。

(51) これら道教儀礼が実践されたのは、瀟湘の盟締結によつて低下した威信の回復を目指したため、とされることが多いが、湯勤福は真宗の後継者を巡る不安感、特に元佐の存在が大きいとする。(湯勤福「宋真宗・封禪滌恥」説質疑―論真宗朝廷統治危機与天書降臨、東封西祀之關係『河北大学学报(哲学社会科学版)』二〇一九一―二)。

(52) 『長編』巻九六・天禧四年七月甲戌条。

(53) 同前注。

(54) 同前注。

(55) 同前注。

詔宣徽北院使曹瑋与崇勲就御藥院鞠訊、不数刻、具引伏。上坐承明殿臨問、懷政但祈哀而已。命載以車、赴城西晋安仏寺斬之。王瑞来「宋代の皇帝権力と士大夫政治」汲古書院、二〇〇一年。熊本崇「宋仁宗立太子前後―慶曆「改革」前史」『集刊東洋学』七九、一九九八年。

張其凡、劉広豊「寇準、丁謂之爭与宋真宗朝後期政治」『暨南史学』二〇〇七―一五。

朱倩倩「宋真宗晚年権力交接問題探析」『宋史研究論叢』二四、二〇一九年。

(57) 『長編』巻九三・天禧三年三月乙酉条。



入内副都知周懷政日侍内廷、權任尤盛、付会者頗衆、往往言事獲從。同輩位望居右者、必排抑之。中外帑庫、皆得專取、而多入其家。性識凡近、酷信妖妄。有朱能者、本單州团練使田敏家厮養、性凶狡、遂賂其親信得見、因与親事卒姚斌等妄談神怪事以誘之。懷政大惑、援引能至御葉使、領階州刺史、俄於終南山修道觀、与殿直劉益輩造符命、託神靈、言国家休咎、或臧否大臣。

(58) 『長編』卷九三・天禧三年三月乙酉条。

時寇準鎮永興、能為巡檢、賴準旧望、欲實其事。準性剛強好勝、喜其付己、故多依違之。是月、準奏天書降乾祐山中、蓋能所為也。中外咸識其詐、上独不疑。

(59) 『長編』卷七九・大中祥符五年十二月丁亥条。ただし李燾は原注

で、これは基づいた『実録』が劉太后の垂簾聽政期に作成されたものであるから、全幅の信頼は置けないとする。

(60) 『長編』卷九五・天禧四年六月丙申条。

時上不予、艱於語言、政事多中宮所決、謂等交通詭秘、其党日固。

(61) 『長編』卷九五・天禧四年六月丙申条

劉氏宗人橫於蜀、奪民塩井、上以皇后故、欲赦其罪、準必請行法、重失皇后意。

(62) 『長編』卷九五・天禧四年六月丙申条。

錢惟演の前に呼び出された知制誥晏殊が、自らの職務権限にないため起草を固辞したあと、事が機密に関わることだったので、「学士院」にそのまま宿泊した、ということから、錢惟演による起草も学士院でなされたのではないか。

『長編』卷九五・天禧四年六月丙申条。

会日暮、召知制誥晏殊入禁中、示以除目、殊曰「臣掌外制、此非臣職也。」乃召惟演、須臾、惟演至、極論準專恣、請深責。

……殊既誤召、因言恐泄機事、臣不敢復出。遂宿於学士院。

……及宣制、則非殊疇昔所見者、不知殊所見除目又何等也。殊不以告人、故亦莫得其詳云。

(64) 『長編』卷九六・天禧四年七月辛酉条。

召宗室、近臣及太子太傅寇準、兵部尚書馮拯、觀苑中嘉穀、遂宴於玉宸殿。

(65) 李迪はかつて劉氏の立后に反対したことで劉皇后から恨みを買っていたこともあり、宰相就任を固辞していたが、太子の勧めもあって相位に就いたという。

『宋史』卷三二〇・李迪伝。

初、上将立章献后、迪屢上疏諫、以章献起於寒微、不可母天下。章献深銜之。

『長編』卷九六・天禧四年七月癸亥条。

上对參知政事李迪、兵部尚書馮拯、翰林学士錢惟演于滋福殿。寇準罷、上欲相迪、迪固辞、於是又以属迪。有頃、皇太子出拜上前、曰「蒙恩用賓客為相、敢以謝。」上顧謂迪曰「尚復何辞耶。」

(66) 『長編』卷九六・天禧四年七月庚午条。

遂召錢惟演、惟演入、对曰「馮拯故參知政事、今拜樞密使、当矣。但中書不当止用李迪一人、盍遷曹利用或丁謂過中書。」上曰「誰可。」惟演曰「丁謂文臣、過中書為便。」又言玉清昭應宮未有使、謂首議建宮、宜即令領此。又言曹利用忠赤、有功国家、亦宜与平章事。上曰「諾。」庚午、以樞密使、吏部尚書丁謂平章事、樞密使、檢校太尉曹利用加同平章事、皆用惟演所言也。

(67) 『長編』卷九六・天禧四年七月壬申条。

上既從錢惟演之言、擢丁謂首相、加曹利用同平章事、然所以待寇準者猶如故。謂等懼、謀益深。是日、準入对、具言謂及利用等交通蹤跡、又言「臣若有罪、当与李迪同坐、不独独被斥。」上即召迪至前質之、兩人論弁良久、上意不樂、迪再三目準令退。及俱退、上復召迪入对、作色曰「寇準遠貶、卿与丁謂、曹利用並出外。」迪言「謂及利用須學士降麻、臣但乞知一州。」上沈吟良久、色漸解、曰「將取文字來。」迪退、復作文字却進、上遽洒然曰「卿等無他、且留文字商量。」更召謂入对、謂請除準節鉞、令出外、上不許。

(68) 以下は、『宋史』卷二二五・宦者列伝・周懷政伝。

(69) 劉承規は、内蔵を管理して慎み深く、権衡の作成や玉清昭応宮の建築、実録・国史・冊府元龜の編纂・校正にも携わった才人で、儒者の風ある希有な宦官であった。景德殿使という班官は彼のために新設されたもので、大中祥符六年（一〇一三）七月に亡くなったとき、真宗は朝を廃したという。（『宋史』卷二二五・宦者列伝・本伝）

(70) 『長編』卷八七・大中祥符九年八月丙子条。

崇儀使、入内押班周懷政為玉清昭応宮都監、西京左藏庫副使、帶御器械王承勛為同都監、供備庫副使周懷信為景靈宮都監、東染院使鄧守恩為会靈觀都監、並通宿宮觀。懷政常在禁中、故増一員。

(71) 『長編』卷八六・大中祥符九年二月庚午条。

詔築堂於元符觀南、為皇子就学之所、賜名曰「資善」、上作記、刻石堂中。命入内押班周懷政為都監、入内供奉官楊懷玉為寿春郡王伴読、仍面戒不得於堂中戲笑及陳玩弄之具、庶事由礼、使王親近僚友。

(72) 『長編』卷九二・天禧二年八月庚辰条。

立昇王受益為皇太子、改名禎。

『長編』卷九二・天禧二年八月庚辰条。

以右諫議大夫、知開封府案黄目為給事中、兼太子左庶子……玉清昭応宮資善堂都監、左藏庫使、長州刺史、入内押班周懷〔正〕（政）為左驥驥使、入内副都知、兼管勾左右春坊事。

(73) 李燾の引く周懷政の『国史』本伝によると、第一段階のあと、真宗に疎んじられるようになったことを不安に感じたことがきっかけだとするようだが、第二段階の拘束時に周懷政が崇政殿東廡にいて禁中に入入りしていたこと、『実録』の方にはその記述がないことから、その信憑性を李燾は疑っている。

『長編』卷九六・天禧四年七月甲戌条原注。

懷政本伝云、上姑務含容、不忍斥其過、然漸疎遠之。懷政憂懼、時使小黄門自禁中出、詐称宣召、入内東門坐別室、久之而出、

以欺同輩。実録亦云然。収懷政時、實在崇政殿東廡、則其出入禁中、固自如也。但丁謂等多為之防、使懷政罕得見上爾、蓋未有疎遠懷政意也。本伝又云上怒甚、而実録無此、疑本伝飾説、今不取。

(74) 『宋史』卷二二五・宦者列伝・周懷政伝

四年七月、与弟礼賓副使懷信謀潜召客省使楊崇勲、内殿承制楊懷吉、閤門祇候楊懷玉会皇城司、期以二十五日窃発、殺丁謂等、復相寇準、奉真宗為太上皇、伝位太子。

(75) このとき丁謂が自ら出仕していないのは、自らが囚われる可能性を危ぶみ、相談の上、代わりに曹利用に参内させたということになるであろう。

(76) 『長編』卷九六・天禧四年十一月己巳条。

(77) このあたりの経緯については、つとに熊本氏が指摘するところである。前掲注(56)熊本論文参照。

(78) 李燾は信憑性に懐疑的ではあるが、クーデタ計画を知った真宗は激怒し、太子をも処罰しようとしたが、宰相李迪の取りなしによって事なきを得たという史料も存在する。

『長編』卷九六・天禧四年七月甲戌条

懷政既誅、有欲并責太子者、上意惑之。李迪從容奏曰「陛下有幾子、乃為此計。」上大寤、由是東宮得不動搖、迪之力居多。

(79) 前掲注(4)拙稿論文。

(80) 平田茂樹「宋代の朋党と詔獄」『宋代政治構造研究』汲古書院、二〇一二年。

(81) 『長編』卷九六・天禧四年七月丁丑条。

太子太傅寇準降授太常卿、知相州。

(82) 『長編』卷九六・天禧四年七月甲戌条原注。

『記聞』載懷政以二月二日懷小刀、对上自割、上因是疾復作、皇后命収懷政下獄、並於宮中得葉公奏言伝位事、乃命楊崇勲告变、誅懷政、貶葉公。按懷政誅在七月、葉公罷在六月、若懷政于仲春為此、則葉公必不待夏末始罷、懷政至秋初乃誅也。然『真宗実録』以仲春疾益甚、不知縁何事爾。『記聞』必誤、今不

取。

当該記事は、現行本の『涑水記聞』巻六にある。

(83) 『長編』巻一一五・景祐元年八月辛酉条。

河陽三城節度使、同平章事、判陳州楊崇勳、落平章事、知寿州。崇勳子閤門祇候宗說監濟州税。先是、内侍押班周懷信言、「兄懷政天禧中給事東宮、最取親信、姦臣謀危皇嗣、心懷忠憤、議除儉党、為崇勳及楊懷吉誣告被誅。今懷吉雖死、而崇勳尚居將相、乞正其事、以慰幽魂。」故有是命。懷吉弟供備庫使懷志、子閤門祇候永孚、入内高班永德、入内黄門永誠永遷、並坐降黜。

(84) 『宋会要』儀制一〇一一五。

景祐元年十月十一日、詔内侍押班周懷信父母特与封贈。

(85) 例えば、張邦煒「兩宋無内朝論」『宋代婚姻家族史論』人民出版社、二〇〇三年。

(86) 例えば、木下鉄也「闘う民政官たち」『朱子学の位置』知泉書館、二〇〇七年。

(87) もっとも、このような范仲淹像についても、実際には後世に形成されたものとされる。宮崎市定「宋代の士風」『宮崎市定全集』一一、岩波書店、一九九二年。